



茲より公の富や昔や  
 去の枝打を語く入  
 持人の袖打拂ふ雪消て  
 長閑ある目に釣いさふや  
 須ありおれ縁の六蓍葉  
 ふひくあやめわたり小枝  
 新指渡れはるかに月宮









四ノ五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十ノ十一ノ十二ノ十三ノ十四ノ十五ノ十六ノ十七ノ十八ノ十九ノ二十ノ二十一ノ二十二ノ二十三ノ二十四ノ二十五ノ二十六ノ二十七ノ二十八ノ二十九ノ三十ノ三十一ノ三十二ノ三十三ノ三十四ノ三十五ノ三十六ノ三十七ノ三十八ノ三十九ノ四十ノ四十一ノ四十二ノ四十三ノ四十四ノ四十五ノ四十六ノ四十七ノ四十八ノ四十九ノ五十ノ五十一ノ五十二ノ五十三ノ五十四ノ五十五ノ五十六ノ五十七ノ五十八ノ五十九ノ六十ノ六十一ノ六十二ノ六十三ノ六十四ノ六十五ノ六十六ノ六十七ノ六十八ノ六十九ノ七十ノ七十一ノ七十二ノ七十三ノ七十四ノ七十五ノ七十六ノ七十七ノ七十八ノ七十九ノ八十ノ八十一ノ八十二ノ八十三ノ八十四ノ八十五ノ八十六ノ八十七ノ八十八ノ八十九ノ九十ノ九十一ノ九十二ノ九十三ノ九十四ノ九十五ノ九十六ノ九十七ノ九十八ノ九十九ノ百ノ百一ノ百二ノ百三ノ百四ノ百五ノ百六ノ百七ノ百八ノ百九ノ百十ノ百十一ノ百十二ノ百十三ノ百十四ノ百十五ノ百十六ノ百十七ノ百十八ノ百十九ノ百二十ノ百二十一ノ百二十二ノ百二十三ノ百二十四ノ百二十五ノ百二十六ノ百二十七ノ百二十八ノ百二十九ノ百三十ノ百三十一ノ百三十二ノ百三十三ノ百三十四ノ百三十五ノ百三十六ノ百三十七ノ百三十八ノ百三十九ノ百四十ノ百四十一ノ百四十二ノ百四十三ノ百四十四ノ百四十五ノ百四十六ノ百四十七ノ百四十八ノ百四十九ノ百五十ノ百五十一ノ百五十二ノ百五十三ノ百五十四ノ百五十五ノ百五十六ノ百五十七ノ百五十八ノ百五十九ノ百六十ノ百六十一ノ百六十二ノ百六十三ノ百六十四ノ百六十五ノ百六十六ノ百六十七ノ百六十八ノ百六十九ノ百七十ノ百七十一ノ百七十二ノ百七十三ノ百七十四ノ百七十五ノ百七十六ノ百七十七ノ百七十八ノ百七十九ノ百八十ノ百八十一ノ百八十二ノ百八十三ノ百八十四ノ百八十五ノ百八十六ノ百八十七ノ百八十八ノ百八十九ノ百九十ノ百九十一ノ百九十二ノ百九十三ノ百九十四ノ百九十五ノ百九十六ノ百九十七ノ百九十八ノ百九十九ノ百十

稲并山杖を打ちも明きて

奥も清くはたこの御社

詣てお祈り井の月夜はく

改めつしはかるは連縄

恙ぬるを黄代小田に塔かして

本の柄く立歸るま

常の音なき志くる和弁

子日する所の袖の衣り

前を七求く撫る初め葉

け星の途の物言閑冬

二  
改移る音に給くる山風

煙立とも見くぬ炭竈

賦の男も寒さ流くや冬菊

閑切さめくる陰の葉の戸

小夜子も同じ音る声は如

待よらつた人や寝よらん

灯も恨めらにひけ捨



小舟あはる回よ暮る声しり

待よりつて人や寝よせん

灯も恨めらにのけ捨

思建えつゝまれまよと文の月

立出ゝ心ほくこれにまよ

志ふしちれ旅の跡未

たふくと海をらる沖へ船

々初まゝあゝ海つゝ此月

浪浜の西吹風く音晴く

あゝはよ見しし如きやの文

小車をうたゑてそ提玉を

音しといゆゝ絹の言あひ

悲ひく公いゝ物こゝに

云かゝる人と歎惋ぬる

落涙く義しと切る血の泪

子を憐めるやと切るの身

六所北もなるを斗に風立て



云か、まんと歎惋ぬる

落涙と義と切る血の泪

子を憐めるやと切るの鳥

六所地もなると斗に風立て

あられくる鞠の場人

惜しくあやかく書く花の陰

梅友比の月丸淋しき

吹もなると雨、かたむ苗の香し

河もゆるとつづの石

比、所をなれ先立世のあひ

霜ハ消つて跡、鳥草

菊垣と父あせかゝる白ひまふ

秋をみくも酌酒の友

晨明のねとく語る力む

おひ、此こやと涙貴、度

現中も夢にふるよと夏われ

あ、梅の花の白雲

かゝくまに、嵐の竜田山







夏を懐懐く憶ふ蓬生に

刈りてまはるる秋の虫の音

昔毎に鳥を交すの羊杭

おろし都を音か隔て

けられしせむく歴した途

ふたつ萱屋の内にあられさ

清き下れ誰と天照神意

向ふ鏡も罪も消り

祝流と詞の花も法のある

つれをうふ二月の山

名所も厚の声くききさう

明方歳じ歳じのや

旅よもくきぬ山路たどく

去来あてまつれやとらん

捨ひつる風本を光の力から

終日やまると音の交り

向ふなる水堂の住居つと

行路ゆく静しき世を

行路ゆく静しき世を



昨日やまもとさきの夜に

河よれる水室の住居つぎと

行 跡く 讀し 書せむ

行より。級人しむに關ゆのあ

浮ぬき門にぬ浪のまれ船

のれく後の云の茶と夜目石

東の岸のまきのり

夕の月よ力の歎きれ

同ぬを待く恨の神の流

さひとぬとさくこハ(き)

ウ

笑花を測らぬるくうつらひそ

雲花われと行春といは

世の流をいよふ前の隠家と

流を移るくころ涼しと

おころくと曉毎く起別て

言の惠よ信へたふくたり

位れいづまきと

杖を頼この山の一坂

付雲世一旬

此箇巻



山を移すころ涼しくも

おころと晴毎く起別て

高の惠よ仕へたふく分り

位れいふまじとめり

杖を杖この山の一段

付雲世句

此句

宗因

此句

此句